

イランという国—あまり書かれない話—

毎日新聞社 客員編集委員
西川 恵

はじめに

イランと聞くと余り良いイメージを持っていない方が居られるのではないのでしょうか。一時イランと日本はビザなし協定を結び、自由に行き来が出来たため、イランの若者が大量に出稼ぎに来ました。中には麻薬などで逮捕される者もいて、あまり良いイメージを持たれていませんでした。

私にとってイランは特派員としては初めての任地で、1982年から84年までの2年間、テヘランに駐在しました。その時、イランという国に魅せられ、その後何度か短期で入るなどフォローして来ました。本日はあまり日本では語られてない話をしたいと思います。メディアではイランのニュースは結構取り上げられるのですが、イランの社会やイランの人びとの考え方とかはなかなか伝えられません。

1.イランの地政学、人口上の国力

イランは東側にアフガニスタンとパキスタン、北にトルクメニスタン(トルキスタンともいいますが)、カスピ海、アゼルバイジャン、アルメニアがあります。以前はソ連を構成する共和国でしたが、1991年末にソ連が解体し、独立国家となりました。イランの西にはトルコとイラクがあります。南はペルシャ湾で、タンカーの難所と言われるホルムズ海峡。イランが経済制裁を受けていた時、もし外国勢力に攻撃されたらこのホルムズ海峡を封鎖するとイランは言っていました。まさにペルシャ湾の喉元を抑えているのです。

こうしてみると、イランが地政学的にも重要な位置を占めていることがお分かりと思います。またイランはヨーロッパ寄りにはありますが、テヘランにいますと非常に日本などアジアに近いものを感じておりました。心理的、精神的な距離と言っていると思いますが、イラン人はアジア的感性を持っている人達です。

イランは冷戦時代アメリカと同盟関係にありました。ソ連と国境を接する地域に巨大なアメリカの軍事施設があり、ソ連の通信を傍受する巨大なパラボラアンテナが設置されていました。パーレビ王政時代で、イランはアメリカと密接な同盟関係を持ち、西側の最前線にあったのです。

国土は日本の4.3倍、そこに7,910万人の人口が住んでいます。テヘランの北はエルブルズ山脈が走っていて、山脈の北側のカスピ海沿岸は農業地帯です。南は砂漠地帯で石油、天然ガス等、有数の埋蔵量を誇っています。宗教はイスラム教ですが、少数派であるシーア派が大部分を占めています。また同じイスラム教国でも、イラン人はペルシャ民族で、ペルシャ文明をもち、アラブ民族とは異なります。言語学的にはインド・ヨーロッパ語系で、フランス語、イタリア語、スペイン語の流れを汲んだ言葉です。アラビア語とはまったく異なる言語です。

ではなぜペルシャ語はアラビア文字を使うのかといいますと、7世紀にイスラムが侵入して来て、古代ペルシャ語にアラブ文字を被せたのです。イランはペルシャ文明の国という点はイランを知るうえで押さえておくべき重要なポイントです。アラブとは一線を画した国です。

2.歴史

アラブであるサウジアラビア、イラク、クウェート、エジプト、シリアは、人工的に国境を引いて作られた国です。これに対してイランは版図の伸び縮みはあっても、いまの地域一帯にペルシャ帝国を築いてきました。王朝はさまざまに興亡してきましたが、ペルシャ文明を基礎に据えた帝国をペルシャ民族は持ってきました。「我々はペルシャ文明を持った民族であり、アラブとは違う」という非常に強い自負心を持った民族です。今は同じイスラムを奉じながらも、気持の上では紀元前何世紀から続く文明を持った民族であるとの誇りと気位を持っています。

ペルシャ帝国は王朝が変遷してきました。2つ前の王朝をカジャール朝と言いますが、カジャール朝からパーレビ朝に替わったのが1925年です。この地域に影響力を及ぼしていた英国の後押しで、コサックの流れを汲むペルシャ軍の将校が、王を名乗ってパーレビ朝を開いたのです。パーレビ朝は1925年から1979年まで約

50年強続きますが、1979年の「イラン革命」により倒れます。

3.イスラム(イラン)革命 1979年2月

1979年に起きたイラン革命は、2人の思想が牽引しました。1人はイスラム法学者のホメイニ師です。ホメイニ師は1960年代半ばにパーレビ体制の圧迫を受けイラクに、イラクを追い出されるとパリに亡命しました。そしてパリを拠点に反政府運動を展開しました。ホメイニ師は「パーレビ国王はアメリカと組んで、国の富である石油資源を安く売り、富を私物化している。この様な腐敗した体制は倒し、イスラム法に基づく統治を行うべきだ」と主張し、保守派に支持されました。

もう1人はアリ・シャリアティという哲学者です。彼は知識人、学生、左派勢力の支持を得ました。革命2年前1977年にロンドンのホテルで不審死を遂げ、イランの秘密警察の仕業だと言われていました。このアリ・シャリアティはパリのソルボンヌ大学に留学し、実存主義哲学とイスラムを結びつけた新しい理論を提示します。

ただここで注意を要するのは、イランがシーア派であったという点です。シーア派とスンニ派の一番の違いは、コーラン解釈が現時点で認められているか否かです。イスラム教を興したムハンマドは、コーラン(聖典)とハディース(言行録)を残しました。ムハンマド亡き後、コーランとハディースがイスラムの指針になりますが、これをどう解釈するかはイスラム法学者の仕事になりました。しかし様々な解釈が乱立しはじめた結果、スンニ派は10世紀にコーラン解釈を禁止します。「この世のありとあらゆる問題は出尽くし、これに対する解釈も出尽くした。よって現時点の解釈をもって解釈は停止する」と宣言します。これを「イジュティハードの門が閉ざされた。」と言います。「イジュティハード」とは教義決定および立法の行為を指します。10世紀の時点で、世界のありとあらゆる現象を説明する解釈は出尽くした、これ以上新たな解釈は認めないと。

これに対してシーア派は解釈停止をしませんでした。今日に至るまでシーア派はコーランとハディースの新しい解釈を許しています。これがスンニ派とシーア派の大きな違いです。スンニ派は混乱を避けた。それに対してシーア派は新しい解釈を認め、或る種の混乱がおこります。しかし一方で、新しい時代に即応した解釈が出てくるダイナミズムをシーア派は持ち続けたのです。

アリ・シャリアティが西洋哲学の実存主義と結びつけてイスラムに新しい解釈の光を与える事が出来たのは、正にシーア派だったからです。スンニ派であれば異端として排除され、人々が耳を傾けることはなかったでしょう。

コーラン及びハディースの新しい解釈が許される事のダイナミズムは、例えば臓器移植をイスラム教の教理上、どう判断するか一つをとってもわかります。10世紀に臓器移植はなかった。イスラム法に照らして臓器移植は適合なのか、スンニ派では判断出来ない。しかしシーア派では新しい解釈が出てくる。一方で無秩序になる可能性があります。では法学者の中で誰が権威をもつのかといえば、多くの信者を集めた法学者が優位を握ることになります。イラン革命前も様々な理論が林立しました。その中でホメイニ師とアリ・シャリアティの理論が多くの大衆を惹きつけ、革命の両輪となっていたのです。

革命前、パーレビ体制はアメリカや欧州の西側世界と緊密な関係を結び、国王及び側近、上流階級が富の多くを握っていました。また西欧文化がイランにもどんどん入ってきて、時にイスラムに反するような風俗も蔓延していた。それに対するアンチテーゼとしての革命でしたから当然、反欧米になり、既得権層の排除に向かいました。イラン革命は別名「モスタザフィン革命」と言われました。モスタザフインはペルシャ語で貧者、貧しい者の意味で、「貧者革命」と位置づけられます。外交路線としては第三世界と被抑圧民族との連帯・協調です。

日本に対してどうだったか。ここが面白いところで、日本は西側に属していましたが、イランは欧米とは区別した。日本は東の国であり、アジアの国である。日本もアメリカに原爆を落とされ、アメリカの支配の下で苦しんだと、日本に対しては一線を引きました。西側世界の中では日本は唯一イランと太いパイプを持ち続けた国です。

イラン革命後に起きたテヘランのアメリカ大使館人質事件によって、イランは近隣のアラブ諸国を含めて国際社会からボイコットされ、経済封鎖を受けます。国内ではホメイニ派とアリ・シャリアティ派の対立が激化します。主導権を握ったホメイニ派は革命防衛隊という軍事組織を作り左派を弾圧し、左派はこれに対抗して爆弾テロを頻発させます。この混乱のさなかイラクがイランに攻め込みます。イラン国内の混乱に乗じてイランの油田地帯を我が物にしようというのがイラクのフセイン政権の思惑でした。しかしこれは裏目に出る。祖国存亡の危機にペルシャ民族のナショナリズムが高揚し、分裂していた国内は一つに纏まります。そして持久戦の末に

イラク軍を押し戻していく。

4. 革命後のイラン体制と、文明の二重構造

国内の体制作りですが、左派を駆逐した保守派はホメイニ師の理論に沿って「ラヤテファギ」というシステムを導入します。ベラヤテファギを日本語に訳すと「高位イスラム法学者による支配体制」を言います。「神権政治」とも言います。司法、立法、行政の三権分立は西側と同じですが、この上に高位イスラム法学者がいて、イスラム方に照らしてその法律や政策が適法かどうか最終判断を下す。初代の最高位のイスラム法学者には当然のことながらホメイニ師が就き、現在は2人目のハメネイ氏です。最高位のイスラム法学者は法学者達の集まり(現在は20人前後)によって決定されます。終身です。

イラン革命前のパーレビ王政はコサックの将校が英国のバックアップを受けて王位に就きましたから、何ら家柄での正当性を持っていない。従ってパーレビ国王はペルシャ文明に自己の政権の正統性を求めた。ペルシャ2500年祭等を開催し、自己の正統性を一生懸命訴求しました。革命後、イランのイスラム政権は一転してイスラムの伝統に政権の正統性を求めました。イスラムこそが最高の価値であり、イスラム精神を我々は世界に広げていく、と。しかし前に述べたようにイランはペルシャ文明を基層に持っている。革命直後はイスラムの価値が前面に出て、ペルシャの伝統は舞台の背景に追いやられました。しかし、年月が経つとペルシャ民族の誇りが覗くようになる。「自分達はアラブとは違う」と。

イランが文明をもってきた事実は大きいと思います。例えば人材の豊富さもその一つです。革命後、反体制派に追いやられた左派は爆弾テロを繰り返し、何人、保守派の指導者が殺されたか解らない。しかしその度に誰かが後釜に出てくる。隣国イラクはサダム・フセイン大統領が2003年の米英対イラク戦争で倒れると、イラク国内は重しを失って大混乱に陥った。「アラブの春」でアラブの国々では独裁者が倒れましたが、強権者がいなくなると多くの国で混乱に陥った。イランとアラブの違いがここにあります。

もう一つ、イランとアラブとの違いは知識人層の厚です。イランの知識人層の厚さはアラブの比ではない。勿論アラブにも知識人は居ますが、イランには知識人が多様に存在して、尚且つ体制に対して批判を敢えてやる、そういう骨の太さがイランにはあります。

何人かの、そうした知識人を紹介したいと思います。

1) アフマド・シャムルー

この人は詩人で、2000年に亡くなっています。特派員時代の1984年にインタビューしました。ノーベル文学賞の最終候補まで残った人で、左派に属します。当時、イスラム政権からは睨まれ、出版規制を受けていました。彼は諺辞典「クーチェ(道)」を出し始めましたが、ABCのローマ字で言えば、最初のAの項を6冊出したところで続編が出版禁止になりました。私はインタビューをしようと、出版社を通じて連絡先を当たった。体制側に睨まれているので受けないだろうと言われましたが、申し込むと「自宅にいらっしゃい」と言われました。彼はフランス語を話したので、インタビューはフランス語で行いました。何故、諺辞典「クーチェ」を書いたか、が私の質問でした。彼の答えはこうでした。イランの文明の基層にはペルシャ文明があり、今はイスラムの価値が喧伝されているが我々はイスラムよりも遥か前にペルシャ文明を持ったのである。我々の社会は如何にペルシャ文明を基礎とした社会であるかを知って貰う為で、一見アラブから入ったように見える諺が実はペルシャにルーツがある。またペルシャにあった諺がアラブに行き、アラブから逆輸入された諺も多い、と。彼が集めた諺は200万。その諺の現代の意味、過去の語源、何故意味が変転して現代に至ったのか過程を一つ一つ書いて行っただけです。AからZまで書けば100冊位になるはずですが、シャムルーは別室の天井までうず高く積み上げられた原稿を見せてくれました。出版規制でいま出版は出来ないが、コツコツと書き続けている。その時、私はイランの知識人の凄さ感じました。

諺の一部を紹介します。「馬の尻尾を切る」という諺は「ずる賢く立ち回る」という意味ですが、本来は違う。ダリウス大王時代に戦場から戦況を知らせる為に早馬を走らせた。馬が検問をノンストップで通過できるようにする印に、馬の尻尾を切った。つまり最初の意味は「物事を正しく早く行う」でした。それが今は「ずる賢く立ち回る」になったのです。「新婚初夜は部屋の鍵を掛けない」という諺。今は「将来良くない事が起きる」、との意味で、アラブにもあるこの諺はアラブから入って来たと思われていた。しかし色々文献を当たって見るとそうではない。遥か2000年位前にペルシャで生まれた諺が、アラブに入って、アラブから逆輸入されたものだったので

す。

そういう一つ一つの言葉の語源、ルーツ、意味の変遷をたどった面白い辞典です。アフマド・シャムルー、彼は 2000 年に亡くなりましたが、亡くなる 2 年程前に電話で話しました。当時、出版禁止はちょっと解かれては又出版禁止になり、まだ全部の出版は出来ていませんでした。

2) アブドルカリム・ソルーシュ

イラン革命時の保守派のイデオロギーを支えたホメイニ師の側近で、革命の時は 30 代です。彼はその時「ベラヤテファギと」体制を正当化しました。高位イスラム法学者は選挙ではなく 20 人の法学者が選ぶ。その権威は何処から来ているのか、最初の頃、彼は神から来ていると言った。20 人の法学者は神の意を受けて選んでいる訳で、最高位にあるベラヤテファギは、神からこの権威を与えられているというのです。

ソルーシュはその理論を徐々に変えて行く。このベラヤテファギの権威は神から与えられているのではなく、人々から与えられたものである。従って人民がもし忌避した時は、最高位に座る法学者はその地位を降りなければならない、と。これは神に権威を求める現在の保守派体制に真っ向から挑戦するものです。いま彼は出版規制が掛けられたり、講演会が禁止されている。外国の大学に呼ばれて、講演にも出かけています。それでも亡命せず、イランで活動をしている。民主主義とイスラムをどう連結させるか。近代社会とイスラムをどう適合させるか、そこに思索を注いでいます。

彼はこう批判されます。「昔、貴方がえていたイデオロギーと違うのではないか」。それに対して彼はこう言います。「革命の時は様々な金属が溶けるつぼに溶けている状態で、時間を経てつぼが冷め、夫々の金属が姿を現して来る。つぼが熱く一つに溶け合っている時と、冷めた時は違ってしかるべきである。私が求めているのは、現代社会及び民主主義とイスラムをどう適合して行くかだ。イスラムは古い宗教で近代社会に適合しないのかと言う人がいるが、私はそうは思はない。ベラヤテファギも人民に足場を置くならば、今日の民主主義と現代社会に決して齟齬を起こさない筈である」

ソルーシュは現在 60 歳位になっていると思いますが、ソルーシュ以降にも様々な哲学者が出てきていて、イスラムを現代社会に適合させて行く知的作業が行われている。日本では余り解らないイランの知的世界です。

3) ハタミ大統領

彼はそれ迄の大統領と違ってドイツに住んだ事もあり、国際社会に通じた人でした。私が特派員だった頃はリベラルな情報大臣で、その後、大統領になりました。ハンチントンの唱えた「文明の衝突」に対して、ハタミ大統領は国連総会で「文明の対話」という逆提案をします。これは文明の対立に危惧を覚えた国際社会から拍手をもって迎えられ、2001 年、国連はハタミ大統領の提案を受けて「文明の対話年」を宣言しました。

日本にも公式訪問をしています。東工大で行われた講演を私も傍聴しました。日本とイランを結びつけるのは「詩と沈黙」である。日本では短歌、俳句など詩が様々な形で人々の暮らしの中に存在している。イランも古代ペルシャ時代から、詩は知的作業の重要な表現形式です。もう一つ「沈黙」。これは欧米にはない。ただ饒舌にしゃべる、ただ主張する、ただ言い募る、これは欧米の文化ですが、沈黙する事で相手が理解出来る。イラン、日本では沈黙する事により相手を理解する。相手の気配を察する。その沈黙から新しい精神が生み出されるという。非常に興味深い講演でした。

イランはインドに近い。インドで生まれた仏教が東と西に分かれた。東は中国から日本に伝わった。西方に行った仏教は西からやって来たイスラムと交わる。そこでイスラム・スーフイズムが生み出される。イスラム・スーフイズムはイスラム神秘主義ともいわれる。スンニ派からは異端とされていますが、ハタミ大統領の言う「沈黙は金」と結びつく。イスラムのスーフイの人達は洞窟に入って瞑想する。これは禅に近い。この「沈黙」で日本とイランは結ばれている、とハタミ大統領は言います。イランの人材の豊富さ、知的な深さを改めて感じさせられました。

5. 地域大国として登場したイラン

イランの力は何なのか。幾つか挙げてきましたが、もう一つ挙げるなら自己変革力する力だと思います。2013 年穏健派のロウハニ大統領が誕生しましたが、それまでの保守強硬派のアフマディネジャド大統領は秘

密裏に核開発をしていたのが暴かれ、国際社会から経済制裁を課せられました。アメリカは1980年の大使館事件から経済制裁を続けていて、核開発で更に強い経済制裁を課しました。

当時、私が新聞のコラムで「イランは黙っていても大国になれる潜在力をもっているのに、核開発をすることで国際社会の警戒を招いて、逆効果になっている。イランは核開発を放棄してこそ地域大国になれる」と書いてきました。

もう一つ書いてきた事は、イスラエルを中心とした「イランを武力攻撃すべき。核をもたれたら手遅れだ」との言う声があるが、自己変革力を持つイランに期待しても良いのではないか、ということでした。自己変革力を持つ点はイランの大きな力だと思います。ロウハニ大統領の2013年の誕生はまさにそれです。イランは100%とは言えないが、ほぼ公正な選挙が行われます。イランの体制は独特の体制ですが独裁体制とは違う。ロウハニ大統領の誕生自体が民主的な選挙がほぼ保証されている証であり、そこに民意が反映されます。「穏健な大統領が出て、国際社会と手打ちする時期」と人々は思ったのです。

イランで世論調査をすると核保有賛成が多数を占めます。しかし一方で、経済をどうにかしないと将来がないとも感じていた。それを秤に掛けた上での選択だったろうと思います。

核合意で欧米は制裁を解除しました。以来、各国のイラン詣でが続いています。ここ数年、相次いで経済制裁を解除された国が3つあります。3年前のミャンマー、昨年のキューバ、そしてイランです。

イランが密かに核開発をしたら別ですが、そういうことがなく国際社会とイランの経済交流が拡大していけば、イランはこの地域のパワーとして登場し、ひいては中東のバランス・オブ・パワーを変えたいと思います。今迄はアメリカ、イスラエル、サウジ3か国対イランの対抗関係でした。イランはシリアと繋がっていました。経済制裁解除でアメリカ、欧米への接近に焦りを感じているのはサウジとイスラエルで、特にサウジアラビアの危機感が強い。

2005年、英国の国際研究所が「イランが地域的パワーとして登場した」との報告書を出しました。イランにとって2つの脅威が排除された時でした。アフガニスタンのタリバン政権はイランの天敵でしたが、9・11による米軍のアフガン攻撃でタリバン政権は崩壊します。また西のイラクのフセイン政権もイランの天敵でしたが、米英のイラク戦争でフセイン政権も崩壊する。つまりイランは東西2つの脅威を米国に排除してもらったのです。「イランが地域パワーとして登場した」と言われたのにはこういう背景がありました。しかしその後、核開発が暴露され、イランは国際社会の経済封鎖を受けました。そして2015年の核合意で、10年ぶりにイランは国際社会に復帰しました。いまイランは自分の影響圏を広げて行く条件にある。イラクにはイランと同じシーア派住民が多数いて、シーア派を通してイランの影響力を浸透させて行くことが出来る。アフガニスタンのダリー語とペルシャ語は同じ言葉ですから、同じ言語を通して関係を強めていくことができる。南のサウジとは対立していますが、北の国々とはいい関係にある。東西北の空間が広がっているのです。これからのイランに是非注目して頂きたい。

【質疑】

Q: 現役時代の経験からイランのパーレビが逃げて、日本企業は多大な被害を受けました。その様な事から中東の国は信用が出来ない国、尚且つイスラムの国は約束を守らないと云うのが自分の印象です。しかしイランだけは歴史の厚みと重さが違うと言うお話ですが、本当に約束を守る国であるのかお伺いしたい。

A: イランの人々はペルシャ商人の気質を持っている。交渉は大変で、値切り交渉も厳しい。でも基本的に約束は守る。アラブとは違う。こう言ったのはアラブ地域の港湾建設も経験した方でした。日本人の言う約束と少し違うかも知れませんが、アラブよりはきちんと守る。競合相手を秤に掛け有利な条件を引き出す交渉であると思います。そして持っているポテンシャルからして、それなりに信頼に足るのではないかと個人的には思っております。

Q: シーア派のイランはシーア派の歴史的経過から見て、地域的に宗教的な影響力を与えるのは限定的ではないかと思いますが先生の見解をお伺いしたい。

A:シーア派は多数派のスニ派に対して「自分達は少数派であり、常に虐げられてきた」という被害者意識があります。イランに鎖で裸の背中を叩いて町を練り歩く祭りがありますが、ある部分非常に被害者意識が強い宗教ではないかと思えます。イラン革命はイスラムの力を再認識させた出来事でもありました。サウジなどスニ派の地域でも、イラン革命に煽られる形で若者がアフガニスタンに馳せ参じ、ソ連軍と戦った。そしてついに1989年にソ連軍がアフガンから撤退するのですが、スニ派は「神を信ずる有神論の国が無神論の国に勝利した」と位置づけます。1989年を我々は東西冷戦で見るが、イスラム圏から見ると「神を信じる側の勝利である」と。アフガンに行った過激派が自国に戻って、その後ヨーロッパに留学し、2001年の同時多発テロに繋がり、今日のISに至る。イランはイスラム見直しのスプリングボードを与えたと云うのが私の解釈です。

西川 恵(にしかわ めぐみ)先生のプロフィール

【略歴】

長崎県生まれ。1971年、毎日新聞社入社。テヘラン、パリ、ローマの各支局を経て1998~2001年外信部長。外信部専門編集委員を経て2014年4月から現職。国際政治・外交・文化についてのコラム「金言」を毎日新聞の金曜日朝刊に毎週連載。毎日新聞社 客員編集委員

【主な著作】

著書に『エリゼ宮の食卓』(新潮社、97年度サントリー学芸賞)、『国際政治のキーワード』(講談社)、『ワインと外交』(新潮社)、『国際政治のゼロ年代』(毎日新聞社)、『饗宴外交—ワインと料理で世界はまわる』(世界文化社)、『歴代首相のおもてなし』(宝島新書)など。『エリゼ宮の食卓』は台湾で、『ワインと外交』は韓国で翻訳された。共訳に『超大国アメリカの文化力』(岩波書店)。公益財団法人 日本交通文化協会事務局長、公益財団法人 日仏会館常務理事、三菱UFJ国際財団専門委員、フランス政府農事功労賞、フランス国家功労賞